

丹治恆次郎先生追悼文

門田修平

まず、丹治恆次郎先生のご逝去を、心よりお悔やみ申し上げます。初めて丹治先生にお目にかかったのは、私が1993年4月に、龍谷大学経営学部から、関西学院大学法学部に赴任したときです。新任教員を囲む昼食会が法学部大会議室で行われ、その席上であったかと思えます。ただそれ以前より、龍谷大のフランス語教員よりお噂はお伺いしておりました。その後、外国語研究室会議などで同席したり、新任教員としての発表をお聞きいただいたりしたかと思えますが、最初の強烈な印象は、当時行われていた親睦会の一泊旅行です。温泉旅館での宴席の際に、新任教員は当然のごとく何か唄を歌うことになっており、当時は何か演歌を歌ったと思いますが、何を歌ったのか全く覚えておりません。ただ、自身の唄よりも鮮烈な印象であったのが、丹治先生が、「赤城の山も今宵限り」という台詞の芝居とともに歌われた「大利根月夜」（田端義夫）でした。非常にダイナミックな、踊りを交えた歌い方で、強烈な印象としてずっと残っております。

丹治先生とは、しばしば阪急神戸線の電車内でお会いしました。そんなときはほとんどいつも、当時あった外国語教員と専門教員の格差問題、特に外国語教員には大学院担当ができない構造的問題をどう考えるか聞かれました。当時、学長室直結の委員会として、外国語委員会を設置され、さまざまな議論を先導されていたとお聞きしております。長らく学長補佐などもこなされ、そのご尽力の甲斐あって、2001年4月には関学初の独立大学院である言語コミュニケーション文化研究科（言コミ）が創設されました。

丹治先生は、法学部を退職されてからも、クリスマス祝会などの折にいらっしゃっていただいていたいました。それが、今年4月8日に

84歳にてご逝去されました。4月11日の葬儀・告別式には参列させていただき、最後のお別れをさせていただきました。

先生は法学部を退職される前に何度かタヒチに行かれていたかと思えます。そのタヒチのお話は何度か伺いましたのですが、何故タヒチなのか、実はちょっと不思議に思っておりました。たまたまつい先日、アマゾン・ジャパンで先生の『最後のゴーガン“異国”の変貌』（みすず書房）という485ページにわたる書籍（2003年刊）を出版されていることを知り、その研究のためだったのかと今になって一人合点した次第です。

ご冥福をお祈り申し上げます。